話し合い

甲斐ム　どうもありがとうございました。今までに役割の上で見たときのいくつもの話題が出てきているわけですが、大きなこととしては、第一に国語科教育と国語教育の関係、つまり、言語教育という大きな枠の中で、他教科と国語科はどんな役割分担をし合っているのかということが、算数を例として問題提起が行われました。第二に、国語教科書が問題だということが出ました。一つは先生が教科書にべったりだし、教科書がペーパー主義に陥っている。補助教材など視聴覚機器を使ったような教科書が必要ではないかというような意見も出ました。それから、第三に、学校教育あるいは国語教育に見え隠れする規範を表すことばとして、「慣れ」とか「習い」とかいうような用語の問題が出されました。これは、私は日本語教育の方で意識していたのですが、今日は佐々木倫子さんから、英語教育の領域でもやはりその問題が根深い状態であるということを指摘されました。第四に、「発信型の言語教育」というときの言語教育を、コミュニケーション能力と言い換えたとしても、そのコミュニケーション能力は、先生方によって捉え方がだいぶ違っているという問題が挙げられております。そして第五に、国語教育と日本語教育の連携の問題があるわけです。

　さて、これからあとの話合いは、問題点の指摘というよりはどうするとよいかという方向で御発言をいただければと思います。ただしかし、まだこんな大きな問題があるぞということは御指摘いただいて、できればどういうようにすればよいかというように生産的な方向で話し合いが展開する、特に、国語教育に対しては日本語教育の方々から御発言いただくし、日本語教育に対しては国語教育の方から御発言いただくという形で、相互乗り入れが行えたらと思っております。話題はどこからでもということで進めていきたいと思います。

西原　　いつも考えていることでいくつか申し上げたいのですが、一つは、こういう問題を考えるときに、日本人だけで、あるいは日本の学校教育にかかわる者だけで考えると行き詰まってくるということです。日本語教育と国語教育がお互いを客観視できる話合いの条件として、英語教育が加わればそれに越したことがないと思いますけれども、日本の学校教育関係者以外の方々や日本人でない方々も含めて話合いが行われるということが、特に文化をまたがっていろいろな接触が起こる現代ではとても大切なことなのではないか、という提案です。

文化間移動の問題

　もう一つは、これだけグローバルに子どもたちが動きグローバルに情報が交換される時代になりましたので、子どものカリキュラムについても、例えばユネスコですとか、そういう規模で、文化間移動の問題として話合いが始まることが必要だということです。例えば、科学という分野について、世界的にこのくらいの年の子どもならこのくらいのことができるというようなことが話し合われてもよいのではないかと思うのです。それは、例えば、外国に滞在する日本人の子弟にとっても、日本に帰ってきたら、滞在した国と同じレベルの科学教育が受けられるというようなことが、国際的な子どもの移動をあまり障害な

く行う手段として必要かつ不可欠なことなのではないかという気がいたします。

国際的に受信・発信できるコミュニケーション能力とは何か

　次に、国語教育についてですが、国際的に発信、受信できるコミュニケーション能力というものは何なのか、ということをことばの違いを越えたところで話し合える土壌が必要ではないか、と思うのです。日本語教育、国語教育を問わず、コミュニケーションということを人間として考えるためにどのような資質が必要なのか、ということを考えておきませんと、そもそも外国語教育というようなことは成り立ちえないはずだ、という認識です。例えば、日本語でも英語でも中国語でもあることができれば、大人として一人前だというようなことが大枠わかれば、それを目指せばいいということになろうかと思うのです。少し大きすぎて申し訳ないのですけれども、そういうことを日頃考えております。

教師を変えていく必要

上野　　私たちは国語教育にしても日本語教育にしても英語教育にしても、良い方に向かって新しくしていきたいという願望にいつも立っているのですけれども、そのときに今、西原さんがおっしゃったような何を目指すかということがあるわけです。目指すときにどう子どもとあるいは学習者と接していくかということには、やはり先生が変らないと中身が変わっていかないのですね。こういう教え方があるとか、こういうやり方があるということが唱えられても、実際にそれを行う人がそれを使いこなせなければ、これは変っていきませんので、やはり問題は教師の中にあるのではないでしょうか。そこで、教師を変えていくということがどうしたらできるのかというようなことも大事なことではないかと思っております。
甲斐ム　教員養成の問題がやはり一つ大きな問題として出てくると思うのですが、先ほど西原さんがコミュニケーション能力ということで、ことばの枠を取り除いたところで国際的に発信、受信できる能力とはどんなものかと発言されました。これは私も普段考えていることなのですが、例えば国際高校などでそういうようなことばの枠を除いたというところで、どういうふうにお考えになっているかというところを少しお伺いしたいと思うのですが。

自分自身を発現させていく

大堀　　的確な答えになるかわからないのですけれども、和光国際高校というのは公立として最初の国際高校なのですが、実際我々のジレンマというのは「国際化とは何だ」と今だに教員の間で言い続けている。もう 10 年経ってもそうなのです。せめて、そういった社会の変化の中に、子どもたちが自然にその中に溶け込んで活躍して、なおかつその中で自分自身を発現できる状況を、そういう環境設定をしようではないかということでスタートしたはずなのに、その私たちよりむしろ生徒たちの方がすんなり越えていってしまって、それこそ、私たちがパソコンをいじるときに壁を感じるのに、子どもたちはまったく素直

に入ってしまう。それと同じように、自然にそういう状況と接する、そういう環境の中で違和感を感じないで、自分自身を発現させていくということが生徒たちの中に意識されているように感じます。ただ一方で、生徒たちは非常に英語や外国語に関して興味を持っているので、そちらの方向は何とか成果らしきものは得ているのではないかなと思います。その他、教科書の枠なども飛び越えてしまったような授業も展開されています。また、逆な話になってしまうのですが、国語のエリアで一般の生徒たちの言語環境が非常に貧弱になってきてしまいまして、その辺のところがむしろ問題だというふうに問われています。特に、理数系の教員から国語を何とかしろというような批判を受けて、非常に私たちもプレッシャーを感じている次第です。今日は本当に勉強になりました。

コミュニケーション成立のための元になるもの

秋吉　非常に問題が大きいところだと思うのですが、まず、何か話したくなるようなことがなければ、コミュニケーションはまるで成立しない。いくらことばが流暢でも、ある場面で私は是非これをあなたに言いたいというその元がないと、ディベートもスピーチも何も成り立たないと思うので、その元になる部分、ことば以前のものというか、問題意識ですとか、知識を広げるということが私どもの高校では一番の目標になっているわけです。次に、伝えたいことはことばがなければやはり通じ合えないので、それを伝えるための手段を一生懸命勉強しましょうと言っています。それから、相手の立場を尊重する意識がなければうまくコミュニケーションはとれないと思うので、お互いの違いの認識をいかにしていくか、つまり、違うということをいかに受け入れるかというハートの面の育成が重要だと考えています。

この間、これは高校ではないのですが、中学校の事例研究の発表が都立教育研究所でありまして、ある学校で中国人の生徒がクラスに入ってきたときに、真っ先にその子の友達になったのは、実は聴力に障害のある生徒だったという報告を聞きました。身振りや文字や絵による交流に聴力に障害のある生徒の力が発揮されて、ことばのハンディの前で、聴力のハンディは消えてしまったのだそうです。他の生徒たちもその中国人の生徒の個性を認めて今では日本語、英語、中国語が飛び交う日々だそうで、非常に感慨深く承りました。御紹介まで。

甲斐ム　ありがとうございました。私は今日は日本語教育と国語教育の連携、歩み寄りということを考えているのですが、国語教育の方では、やはり中教審などの意向を受けて他教科との総合化といいますか、合科というような方向を目指している。そうすると、他教科との総合化というところにいくことが、日本語教育との歩み寄りになるのかならないのか、ここが私にはわかりにくいのですが、そこら辺りについてはどうでしょうか。文部省の相澤秀夫さん、合科ということと国語と日本語教育の連携というそこら辺りに何かお考えがあったらお願いします。

認識の総合性

相澤　今のお話のいわゆる合科について、まずお話したいと思います。合科に関連して

現在、「総合的な学習の時間」ということがいろいろ言われておりまして、それが何か、新しい教育の可能性を切り開いていけるのではないか、と期待されているわけです。ただ、国語と他教科との合科を考える場合でも、総合的な学習について考える場合でも、それらが新しい国語科教育を切り開くことになるのかを見極めていく必要があります。そうでないと、いわゆる従来言われてきた多様な活動はあるけれども、学習能力の獲得にはならないという、今までの失敗、同じ轍を踏むのではないかと思っています。例えば、総合と言った場合に、「総合」ということば自体にいろいろな多様性があります。例えば、認識の総合性があります。あるいは学習内容そのものの総合性もありますし、学習方法の総合性もあります。いわゆる言語の教育の立場からしたとき、国語科がどのような総合性を求めているのかが問われます。私はあくまでもやはり認識の総合性、ことばに即して認識を総合していくというところを狙っていくのだと思います。

日本語教育と国語教育との関わり

　それから、もう一つ、日本語教育と国語教育の関わりがどうなのかというのですけれども、今までいろいろ御意見があったように、日本語教育と国語教育とをどうしても明確に分けてしまいがちでしたね。明確に分けることは個々の目的からすれば、大事なのだと思いますが、これからのいわゆる国際社会の進展の中でのことばの力の育成ということを考えたときに、どうも簡単には分けられないのではないか、というふうに私は思っています。むしろ、国語教育の立場からすれば、かなりシステム化された日本語教育の方法や内容をもっともっと国語教育に取り入れていいのではないだろうかと考えています。また、先ほど秋吉さんからも出されたかと思いますが、「何を学ぶのか」という「何」ということを考えたときに、やはり国語教育の持っている財産を日本語教育の方でももっともっと取り入れてもいいかもしれません。

甲斐ム　日本語教育と国語教育は名称はともかく、内容の方ではもうかなり重なっていくべきだというような非常にうれしい発言がおりましたが、高木まさきさん、今のところでどうでしょうか。

日本語教育と国語教育それぞれの立場の位置づけを明確に

高木　　今日のお話ですと、日本語教育の方でも取り出し授業による例えば構文とかそういうことの学習だけではなくて、国語教育風にいうと、実の場というか生きた場でそういう学習をするということの効果が非常に注目されているということだと思うのですけれども、国語教育の方でも最近はそういう考え方があると思います。ただ、そういう意味で日本語教育を受ける児童生徒の中にもいろいろな段階があると思いますので、例えば一緒の授業でやるかどうかということは、それぞれまた個別の問題があると思いますが、ただ、そうしてきますと、やはり甲斐雄一郎さんがおっしゃったように、国語科というのは一体何をやるのか、というところが非常に見えにくくなっていくということもあるのかな、と思います。日本の教育においては、やはり同じようなことが起こってくるのかな、という気がしますので、やはり、ことばの教育を中心に担うそれぞれの立場、日本語教育と国語

教育がいったい教科の中でどこまでを押さえるのか、いうことの位置付けをはっきりしていかないと総合化のことを考えていく場合にも、大きな混乱を産むということがあるのではないかと思います。甲斐さんがおっしゃったように、必ずしも明確な仕分けをしない方がいいという立場ももちろんあると思いますし、僕は個人的にはその方が強い考えですけれども、それにしましても、いろいろ考えていきますと、非常に曖昧な部分が出てきますので、それをやはり考えるというのが大事かな、というふうに思います。

口語文法を外の視点から捉える

　それから、総合化ということではないと思うのですが、個人的にはとても日本語教育の方に学びたいなと思っていたことの一つに、例えば、学校ですと小・中学校で、口語文法を国語でやるわけですが、いわゆる学校文法というのは誰に聞いてもつまらないわけですね。そういうのを受けてきた子どもたちが、例えば大学に入って、横浜国大の場合、教員養成課程の中で日本語教育を結構取れますので、日本語教育の授業を受けた子たちが、「その授業で文法について勉強したのがとても面白かった。日本語の文法はこんなに面白いのか。」というふうなことを言うわけですね。その内容については、僕もまだ詳しく勉強していないのでわからないのですが、ただそういうように文法というのをいわば外の視点から捉えることによって、日本語はこういうものなのか、ということが見えてくるのだろうと思いますし、また、それは異文化の人たちと話し合うため、あるいは世界共通に理解し合うための言語の使い方がそういう中からだんだんに見えてくるような気がするものですから、そういう意味では日本語教育の考え方を非常に学びたいな、というのがありました。そういうところを具体的に詰めていくことができれば、少なくとも国語教育にとってはかなりありがたい結果が得られるのかな、というふうにはずっと思っておりました。
甲斐ム　今、国語教育の立場から、両者の連携、あるいは歩み寄り、学び合いというところについて御発言いただきました。続いて、日本語教育の方は連携、あるいは両者の関わりをどう考えているのかということについて、午前中に司会をされた吉野文さんにお願いいたします。

外国語学習を通じて学ぶもの

吉野　　連携ということでは、うまくお話できないかもしれないのですが、ただ、今、高木さんがおっしゃった、例えば、日本語を外の視点から見るということで考えてみますと、小学校で広く外国語として日本語を教えているオーストラリアで「です・ますフォーム」と「プレイン・フォーム」を日本語を外国語として勉強している子どもたちに教えるメリットは何か、という研究発表を聞いたことがあります。それは相手によって話し方を変える、いろいろな待遇のレベルがあることをまず、日本語を通して知る。では、それが英語にはないの、と考えてみたときに、英語にもやはりそういうもの、つまりフォーマリティやポライトネスがあるのだ、というように見方が広がっていく。そういう意味で、小学校の段階でも「です・ます形」と「プレイン・フォーム」を教えることは意義があるのだ、という話をうかがったのですけれども、そういう意味で、いろいろなことばの有り様を知

っておく、あるいは経験していくということは、決して無駄ではないし、それが次のことばであるとか、あるいは別の教科であるとか、そういうことに転移していく部分がかなりあるということが、その話でうかがえました。そういう意味で、日本語教育と国語教育とは言語教育としての接点といいますか、果たしていく役割の共通点というのはあるのではないかと思います。

甲斐ム　３者いろいろと御発言をいただきました。どなたか発言を希望する方はいらっしゃいますか。

教科間の連携

山田　　最後に少しだけ、希望を述べさせていただきます。実は、先ほど甲斐雄一郎さんのお話をうかがいながら、ドキッとしたのですけれども、例えば社会科でどこかの見学をする。それなのに、国語科で記録文を書かせる、そういう連携をしないでいる先生っていないでしょうね、とおっしゃいました。実際には、だんだん教員の中でもそういった教科間の連携が子どものことばの力、それから社会科のいろいろなものを見る力を伸ばすことに大きな意味があるということには、非常に多くの教員が気づいてきてはおります。けれども、一般的ではありません。先ほど、上野さんが教師が変わることが大事だ、というお話をなさいましたけれども、私たちは教師が変わらなければいけない、それから、みんなで力を出し合って変わっていきたい、とは思っているのですがなかなか難しいところです。それで、今のまま、このままですと、やはり国語は変らないのではないか、言語教育は変わらないのではないか、という先ほどの話と繋がるのですけれども、そんな思いがあります。そこで、国語科教育として、是非これは押さえなければいけない、というものをきちんと出していただく。それから他教科と関連しながら、この教科と関連してことばの力のこういった部分、例えば筋道を立てて相手に分かるように話をする、ということについては、算数科のこの単元、算数との連携が有効ですよ、とか、そういったようなものがあれば、教師は変わっていけるかなと思います。

古典を学ぶ意義を捉え直す

秋吉　　高校のことになるのですけれども、外国人や海外帰国生徒などを教えていまして、国語の教科の中にあります古典というものが、非常に負担になっている、ということを保護者の方ですとか、本人からも聞くわけなのですね。特に、2 年生では国語Ⅱ５単位の中の３単位が古典に当てられて、現代文の授業は２単位というわけなのです。そういう中で古典を学ぶ意義というものを、ことばという側面、あるいは国際理解という側面からもう少し捉え直していかれたら、という気がしまして一言申し上げました。

国語科が担う部分

甲斐ム　国立大学の入試センターの試験で英語をやめるという話があったときに、ついでに国語もやめたらどうだいう意見が出ていました。これは、何をもって言語能力とするか、

社会に必要な言語能力とするか、いわゆる言語文化についての能力とするかに分かれているように思います。国語という教科は、他教科の基礎として働いていく部分があるわけで、そのことについて今日は寺井正憲さんが算数に関連づけて、算数の方も基礎に働いているぞ、ということを指摘してくださった。もう一つ、国語という教科は他教科の基礎に働くだけでなく、それらの教科を統括する働きもあるわけです。その統括する働きというところで総合とか、合科という問題が出てくることになると思います。先ほど甲斐雄一郎さんが突き詰めていくと国語という教科の存在が危うくなってくると言われました。これは教育課程審議会の議事録などを読んでいると出てくるのですね。学年が上になってくると、国語の授業は少なくしていいではないかという指摘が出ております。

学校図書館による教育活動の展開

田中　先ほど、他教科との連携とか、あるいは教科の総合、ないしは教科の再編とかいうことが進むということを申し上げましたけれども、もう一つ、無視できないこととして学校図書館があります。去る６月に学校図書館法の一部が改正されて、司書教諭が、次の学習指導要領の告示と同時に、2003 年の４月１日から全国の小、中、高、特殊教育諸学校の 12 学級以上の学校には必ず配置されるということになりました。司書教諭の役割ということを考えたとき、また、他教科との総合とか、あるいは国語科が他の教科にどう働きかけができるかだとか考えたとき、結局、学校図書館などを中心として、学校の教育活動を展開していくということをしっかり考慮に入れながら、これからの国語教育の改善というものも考えていかなければならないと思います。

学習者の視点を取り入れていく

上野　先ほど、山田さんのお話をうかがっていて、私も初中等教育の現場にはおりませんけれども、学習者は大学生や成人にもおりまして、第二言語教育ということでは共通点があります。私たちが今ここで議論していることは、やはり教える立場で議論していることがほとんどなのですね。先ほどの話で、新しい生徒が入ってきたときに、聾の生徒が近付いていって、そこが核になって環境ができていったというようなことがありましたけれども、そういった生徒の立場から環境なり、それから学習のどういうところに難しさを感じているかということですね。例えば、国語教育を受けているのだけれども、「社会」ではどういうところがとても難しかったとか、あるいは「算数」の中でもどういうところが最初の段階ではわかりにくかったとか、これはかなり時間がかかると思うのですけれども、教育を経た人から反省のような形で聞くこともできますし、その段階で雑談の形で聞くこともできると思うのですが、教師側の視点を変えて、学習者の視点をふんだんに取り入れていく必要があるのではないかと思います。

甲斐ム　いろいろとご意見をいただいている間に時間がだいぶ 5 時に近付いて来ております。つきましては、このあと国語教育の立場からのまとめを湊吉正さんにお願いいたします。それから、日本語教育からのまとめを石井恵理子さんにお願いいたします。それから、新プロの方からのまとめということで、西原鈴子さんに御発言いただきます。